

災いに立ち向かうための祭礼や儀礼

栃木県立博物館 人文課主任 宮田 妙子



天祭(宇都宮市東下ヶ橋・2016[平成28]年) 栃木県立博物館蔵

新型コロナウイルスの発生によって、私たちの生活は変化を余儀なくされている。病の全容や対処方法を探っているという状況にある今は、良かれと思われることをするしかない。ただ、これまでも同じような事態は起こってきた。災いに対する先人たちの試みは、民俗事象に見え隠れしている。

災いとされるものはさまざまであるが、起こりうる時季がある程度予測できるものもある。例えば、雷、風雨、雹による害や疫病などは、夏から秋にかけて多発する。

この時季は実りを控えた農作物の生育に重要な時であるため、立春から数えて二百十日目(太陽暦では9月1日頃)を厄日として、この前

後に農作物に風やそれにまつわる害がないことを祈る

風祭を行う所が多い。その形態は多様だが、宇都宮では、豊郷地区や篠井地区などで獅子舞を奉納し、姿川地区、清原地区などでは天祭を行う。また、現在七月に行われる篠井地区の石那田八坂神社の天王祭

は、かつて当地に疫病が流行した際に始められたという。疫病を避けるために、悪疫を防ぎ除ける御利益があるとされる牛頭天王を祀り、祭礼をする。

これらに関わったり目にしたたりすると、災いの流行を意識し、備えることができたのである。

しかし、やはり、災いに見舞われてしまうこともある。県内各地では、「やんめ」になつてしまつたら、目やにを棧俵(米俵の蓋)などにつけて辻などに置く、やんめ送りをすると治るといわれる。「やんめ」とは流行り目(主に流行性結膜炎)のことで、感染力が強い上に、かつては特效薬もなく、重症化することもあったため恐れられていた。疱瘡(天然痘)は、宇都宮でも昭和時代初め頃まで死者が出る大流行を経験した病で、同様の儀礼が知られ



厄神送り(鹿沼市笹原田・1984[昭和59]年)
※やんめや疱瘡送りと同種だが、これは正月行事
柏村祐司氏提供

る。多くの関連の民俗事象から、災いは神のような存在がもたらすという人々の考えが指摘されている。やんめおよび疱瘡送りといった儀礼は、神聖なものとして扱われることが多い棧俵などを使ってこうした神を丁寧に送るなどにより、外の世界との境と完全を祈るものと解釈される。同時に、外に置かれた棧俵などは人々の目にとまることとなり、病の発生を知らせる役割も担うと考えられる。こうした民俗事象を見ていくと、先人たちは、災いに対峙するために、心構えと予防をしたという心の安定を図ること、直面した時には良いと思われる対策を粛々と行うこと、そして、一連の流れにおいて、情報や思いを集団で共有していることを重要視していたのではないかと感じる。

風景に溶け込む民俗事象を意識的に見てみると、今にも役立つ思いや仕組みが読み取れる。